『沖縄芸術の科学』第34号別刷

日本と Museum der Kulturen Basel 所蔵沖縄織物の比較

柳　悦州

2022年3月

日本と Museum der Kulturen Basel 所蔵 沖縄織物の比較

柳　悦州

A Comparative Study of Okinawan Woven Fragments in the Museum der Kulturen Basel and in Japan

Yoshikuni YANAGI

The author conducted a survey of Okinawan textiles at the Museum der Kulturen Basel in Switzerland, the Textile Museum Krefeld in Germany, and the Wereldmuseum Rotterdam in the Netherlands during 2017-2019. J. Langewis, a Dutch art dealer in the 1950s, was deeply involved in the collection of these Okinawa textile materials in Europe. The author focused on the textile fragments from the surveyed materials and studied their relationships with both textile fragments held in Japan and the textile materials published in books. As a result, the eight textile fragments in the Museum der Kulturen Basel were estimated to be the same as those in the museum collections of Okinawa and the thirteen textile fragments in the book. These Japanese textile materials were compiled by Nakai Keinosuke and others in the 1950s and the 1960s. Keinosuke Nakai had a business in Kyoto called Tawaraya, which dealt in antiques. It is thought that Langewis obtained many of his textiles from there. There is a possibility that the textile materials from Okinawa were divided into two parts, one in Japan and the other in Switzerland, through the agency of Keinosuke Nakai and Langewis. As for the Museum der Kulturen Basel's textile fragments, we found six pairs of twelve items that were registered with different collection numbers, but were found to have originally been the same textiles.

１．はじめに

筆者は在欧沖縄染織品コレクションの調査研究を継続しており、昨年は「在欧沖縄紅型コレクションと日本の美術館所蔵品との比較」について研究し報告した[1]。

本年度は、在欧沖縄織物コレクションの中から Museum der Kulturen Basel 所蔵の沖縄織物裂に注目し、日本の博物館所蔵品や書籍資料中の貼付織物片や写真と近似する資料について検討した。

2017 年より筆者等は在欧の沖縄染織品調査研究を継続してきた[2]。最初はバーゼル（スイス）の Museum der Kulturen Basel（以下 MKB と記す）所蔵の 113 点の沖縄染織品について、チューリッヒ大学トムセン教授、MKB と共同調査を行った。

2019 年度科研費「在欧沖縄染織品の調査とそのコレクションの成立に関する研究」[3] の助成により、トムセン教授を研究協力者として、在欧沖縄染織資料調査を行っている。日本に所蔵されている紅型裂と近似する資料については前稿[1]で報告した。

本稿では、MKB 所蔵沖縄織物について

（1） 同一の織物資料から分割されたであろう複数の資料が MKB 所蔵品の中にあるか

（2） 日本の博物館所蔵品の蔵品および書籍掲載品と比較検討し、同一織物資料と考えられるものがあるか

等について比較検討を行った。

Textile Museum Krefeld、World Museum Rotterdam の織物資料も研究対象として詳細な検討を行ったが、同一裂と考えられる資料は見つけ出せなかったため、本稿では MKB 所蔵織物資料について検討を行った。

2．資料

在欧沖縄織物コレクションとして MKB（158 点）、Textile Museum Krefeld（13 点）、World Museum Rotterdam（7 点）の 3 博物館所蔵沖縄織物 178 点を研究対象とした。比較対照としての織物資料は

・沖縄県立博物館・美術館所蔵俵屋資料（91 点）、Hawaii 俵屋資料（18 点）[4]

・日本民藝館田中俊雄資料（994 点）

・静岡市立芹沢銈介美術館（17 点）

・『琉球染織名品集』中川伊作・明石染人共著、京都書院（京都）、1951（26 点）

・『琉球裂』大道弘雄著、リーチ書店（大阪）、1954 （7 点）

で、合計 1153 点である。

３．方法

在欧織物資料 178 点、対照在日本織物資料 1153 点、合計 1331 点について、調査データをもとに、新たな織物統合データベースを作成した。今まで調査してきた博物館所蔵品のデータを統合し、さらに書籍等からの画像を加え、織物の素材や織密度、織柄の構成要素等から検索抽出を行い、比較検討を行った。

４．結果

在欧沖縄織物コレクション 178 点の中で、MKB 所蔵品の織物資料 20 点について、同館所蔵品と同一、あるいは他資料と同一であろうと考えられる資料が見つかった。下記にその結果を 5 種類に分けて示した。

（1） MKB 所蔵資料で、異なる所蔵番号として登録されているが、同一資料と考えられるもの、6 組 12 点。

・MKB 所蔵番号 IId4256 と IId6036（写真 1）
・同 IId4734 と IId4735（写真 2）
・同 IId4743 と IId4755（写真 3）
・同 IId4749 と IId4754（写真 4）
・同 IId4758 と IId4759（写真 5）
・同 IId4764 と IId4768（写真 6）

（2） MKB 所蔵資料とホノルル博物館所蔵資料[4]が同一裂の一部と考えられるもの、1 組

・MKB 所蔵番号 IId4763 と Hawaii 俵屋資料 9466（写真 7）

（3） MKB 所蔵資料と文献資料が同一裂と考えられるもの、2 組

・MKB 所蔵番号 IId4773 と『琉球裂』40（写真 8）
・同 IId4782 と『琉球染織名品集』55（写真 9）

（4） MKB 所蔵資料と沖縄県立博物館・美術館所蔵俵屋資料および文献資料と同一裂と考えられるもの、5 組

・MKB 所蔵番号 IId4770 と県博俵屋資料 1-24、3-24、『琉球染織名品集』42（写真 10）
・同 IId4774 と県博俵屋資料 2-46、『琉球染織名品集』67（写真 11）

・同 IId4766 と県博俵屋資料 2-44、『琉球裂』大道著 39（写真 12）
・同 IId4775 と県博俵屋資料 2-30、『琉球裂』大道著 42（写真 13）
・同 IId4772 と県博俵屋資料 2-38、『琉球裂』大道著 44（写真 14）

５．考察

写真 1 の MKB 所蔵番号 IId4256 は裂資料であり、IId6036 は着尺の長さがあり反物の形状をしていた。2017 年 8 月の MKB 調査時に、IId6036 の反物の一部が IId4256 であると、糸質や柄の状況から確認していた。IId6036 の一端を切り取ったのが IId4256 であろうと考えられるが、現地調査時に写真 1 下で示した資料の反対側は記録していない。

写真 2 は MKB 所蔵番号 IId4734（左）と同 IId4735（右）であり、非常によく糸質や織密度、絣柄等が似ている。いわゆる久米島紬番手貢納布に類する織物裂と考えられる。両資料とも幅 19㎝であり、着尺用の布幅を半分に縦に切った形状である。長さは 112㎝（IId4734）と 115㎝（IId4735）であり、衽として使われていた裂と考えられる。

写真 3　IId4743（下）は、裏面に糊の跡があり縞帳に貼附されていたものと考えられる。織密度やロートン浮部分の経糸の色使いが IId4755（上）と同一であり、同じ着物から縫い解かれた裂と考えられる。

写真 4　IId4749（上）には、針穴が裂の左端に一直線に認められ着物の一部であるが、形状（幅 12㎝、長さ 33㎝）からはどの部分なのか推定できない。写真 4 の両資料は、織密度が等しく、経縞と経緯絣の柄も等しく同一の着物から分けられた裂であると考えられる。

写真 5、6 も同様に、同一着物から分けられた裂であると考えられる。

写真 7 は、MKB 所蔵 IId4763（下）と同一裂と考えられるホノルル美術館（Hawaii）所蔵俵屋資料 9466（上）[4] である。Hawaii 俵屋資料は写真だけの資料であり糸質や糸密度等のデータは不明である。しかし画像上で両者を比較すると、糸の太さや格子柄の構成要素（柄を構成する糸の本数等）は全く同一であり、同一の織物裂から分けられた資料であると考えられる。

写真 8，9 も同様である。MKB 所蔵資料と同一の資料が『琉球裂』、『琉球染

織名品集』掲載資料にある。基本的な織物データが不足しているが、画像を詳細に比較すると同一資料から分割された資料であるとわかる。

写真 10 は、MKB 所蔵 IId4770（右下）と同一裂と類推できる複数資料の例である。左の 2 点は沖縄県立博物館・美術館所蔵俵屋資料 1-24 と 3-24 であり右上は『琉球染織名品集』42 である。どれも格子部分の糸質や色構成から同一裂が分割されたものと考えられる。

写真 11、12，13，14 も同様に MKB 所蔵織物裂と、沖縄県立博物館・美術館俵屋資料、書籍掲載資料が同一裂であろうと考えられる資料である。

前稿[1]では、紅型裂資料の同一資料について検討し、模様が矛盾無く繋がる同一資料 6 種と､同一資料だが繋がらない資料 6 種を報告した。本稿の織物の場合、織り模様が矛盾無く繋がる資料は見出せなかった。各資料の保存状態を観察すると、頻繁に使用された形跡が見いだされる。裂地資料では、使われた後に縫い目を解かれて端布として保存されるのが通常である。使い込まれた着物の場合、腹部や臀部、衿などの損傷が激しく、布地が薄くなっていたり折り目がすり切れたり日に焼けたりしている。比較的汚れや痛みが少ない部分は縫い込まれる量が多い衽である。解かれた織物は痛んだ部分が除かれ、大小様々な大きさの布片として流通したと考えられる。したがって、本稿で取り上げた織物裂も、最初は同一の着物であったが、痛みの少ない部分を選び、裂地として蒐集されていたものと考えられる。これが同一資料であるが繋がる資料が見いだせない理由のひとつであろう。

紅型資料の場合、使用頻度が織物に比べ低く、痛みが少ないこと、大柄の模様が多いこと等の理由により、流通する紅型裂の大きさが大きく、さらに数量が少なく価格が高いことから、入手時に切り分けられたと考えられる。

オランダ人美術商 J. Langewis は 1950 年代に京都を中心に滞在し、沖縄の染織品を多く蒐集した[5]。『琉球染織名品集』『琉球裂』は、それぞれ 1951 年、1954 年の刊行であり Langewis が日本に滞在し活躍した時期に近い。現在の沖縄県立博物館・美術館は、第二次世界大戦終了後、1946 年沖縄民政府立東恩納博物館として設立され、その後 1953 年に沖縄民政府立郷土博物館、1955 年琉球政府立博物館と変遷しながら、戦災で失われた沖縄文化の収集を積極的に行っていた。

俵屋資料[5]（沖縄県立博物館・美術館）の詳細は不明であるが、この時期に収集された資料であると考えられる。ホノルル美術館所蔵俵屋資料についても同時期の資料といえるだろう。

6．おわりに

1950 年代までに京都に集積され出回った沖縄織物は、一部は Langewis によってヨーロッパに渡り、また俵屋資料沖縄染織裂帳として沖縄とハワイに、2 点は蒐集家を経て書籍として出版されたといえる。

中井敬之助は、時代裂を蒐集し、京都の時代裂専門店「俵屋」で販売していた。同氏が蒐集した沖縄染織品の展覧会図録[6]に明石染人の紹介文と、中井の挨拶文が掲載されている[7]。俵屋と中井敬之助に関する資料は少なく、今後の研究課題といえるが、戦前戦後に沖縄の染織品を積極的に蒐集し頒布した。Langewis の蒐集の一部も俵屋を通して入手された可能性が高い。

本稿では、在欧沖縄染織コレクションの成立について、沖縄織物裂を中心に検討を行ってきた。その結果、1950 年代後半の京都を中心に織物コレクションが成立していったことがある程度明確になってきた。

沖縄でつくられた染織品とヨーロッパの沖縄染織所蔵品の間には、本稿で明らかにしてきたように、織物では、Langewis と京都中井敬之助（俵屋）という二人の人物が大きく関わっていた。

同一資料から分割された織物裂が複数存在し、それらは沖縄、日本、ハワイ、ヨーロッパに所蔵されていた。またデータベースによってそれらを確認できたことが本研究の成果である。着物の形をした在欧コレクションについても同様に京都を中心に蒐集が行われたと考えられるが、詳細については今後の課題としたい。

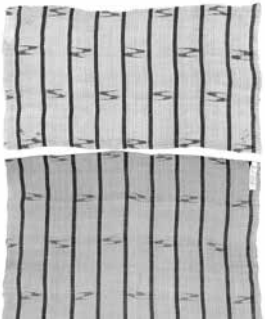

写真１　IId4256（上）、IId6036（下）部分

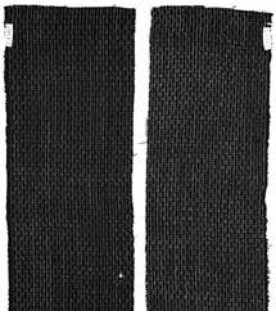

写真２　IId4734（左、部分）、IId4735（右、部分）

写真３　IId4755（上）、IId4743（下）

写真４　IId4749（上）、IId4754（下）

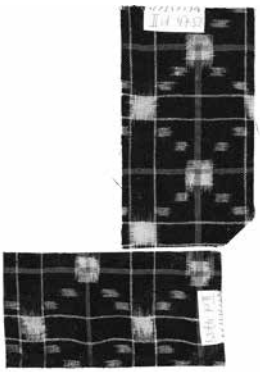

写真５　IId4758（上）、IId4759（下）

写真６　IId4764（下）、IId4768（上）

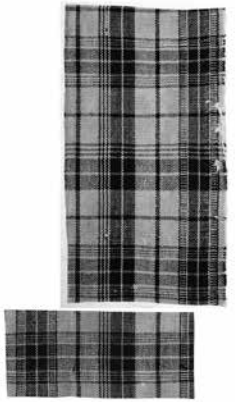

写真 7　IId4763（下）、Hawaii 俵屋資 9466（上）

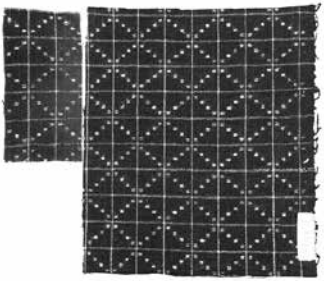

写真 8　IId4773（右）、『琉球裂』40（左）

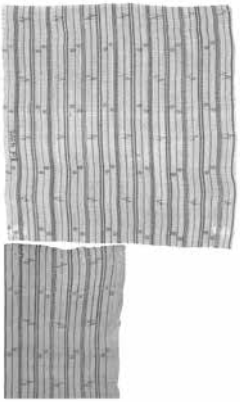

写真 9　IId4782（上）、『琉球染織名品集』55（下）

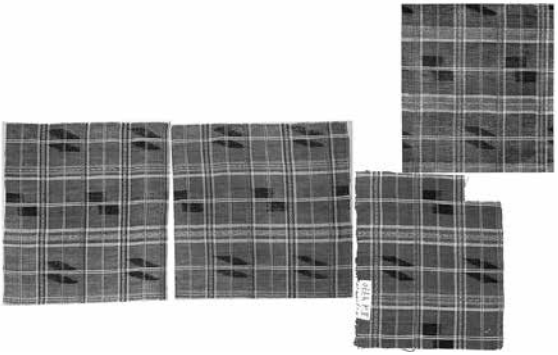

写真 10　IId4770（右下）、『琉球染織名品集』42（右上）、県博俵屋資料 1-24（中央）、県博俵屋資料 3-24（左）

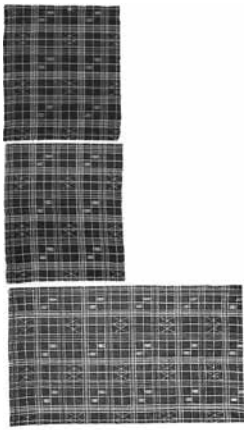

写真 11 IId4774（上）、県博俵屋資料 2-46（中）、『琉球染織名品集』67（下）

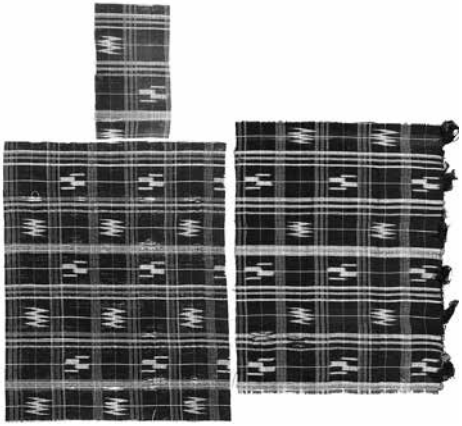

写真 12　IId4766（右）、県博俵屋資料 2-44（左）、『琉球裂』大道著 39（左上）

写真 13　IId4775（右上）、県博俵屋資料 2-30（右下）、『琉球裂』42（左）

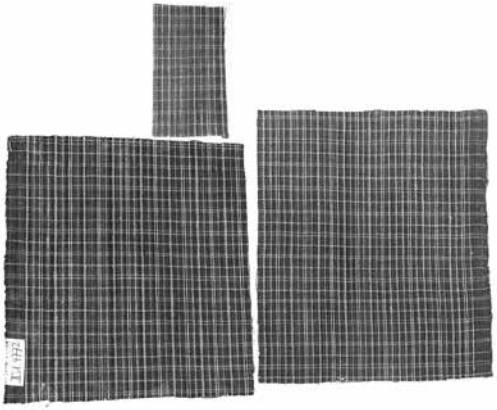

写真 14　IId4772（左）、県博俵屋資料 2-38（右）、『琉球裂』44（上）

註

1 柳 悦州「在欧沖縄紅型コレクションと日本の美術館所蔵品との比較」『沖縄芸術の科学』第 33 号、沖縄県立芸術大学附属研究所、2021、pp.73-84

2 在欧沖縄染織コレクションの調査は、筆者の他、新田摂子（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所講師）、平田美奈子（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）が中心となって行ってきた。ヨーロッパ側共同研究者は、ハンス・トムセン（チューリッヒ大学教授）である。

3 2019 年度科研費「在欧沖縄染織品の調査とそのコレクションの成立に関する研究」（国際共同研究強化（B））、研究代表者：柳 悦州、研究分担者：新田摂子（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所講師）、平田美奈子（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）、海外共同研究者：ハンス・トムセン（チューリッヒ大学教授）。

4 ホノルル美術館所蔵俵屋資料は、沖縄県立博物館・美術館学芸員與那嶺一子氏が 1995 年に現地調査し撮影した。同氏よりスライドフィルムの提供を受け、織物統合データベースに画像入力し、画像から知り得る情報を加えた。資料の番号は便宜的に付与した整理番号であり、所蔵番号ではない。

5 沖縄県立博物館・美術館所蔵の俵屋資料裂帳は 3 冊存在している。装丁等から戦後に張り込まれた裂帳と思われるが、県立博物館が復帰前後に所蔵したと伝えられている（與那嶺一子氏談）が、詳細は不明である。

6 展覧会図録『古代琉球染織と時代裂展覧会』、1941、東京日本橋高島屋

7 新田摂子「日本本土で開かれた沖縄染織品の展覧会について」『沖縄芸術の科学』第 33 号、沖縄県立芸術大学附属研究所、2021、pp.101

本研究は JSPS 科験費 19KK0005 の助成を受けたものです。